『精神現象学』に於ける存在への問いの展開

末吉, 康幸

Sueyoshi, Yasuyuki

https://doi.org/10.15017/1397680
「精神現象学」に於ける存在への問いの展開

ヘーゲルの「精神現象学」（以下、『現象学』と略す）に於て、意識を或いは真なる知の成否を問うことと、存在するという
こと或是いは真理の意味を問うこととは、不可分である。両方の問いは、両者の間の弁証法に於て展開される。「現象学」A、
意識の章の（一）感觉的確信」と（二）知覚の節に於けるこの弁証法の展開に着目しつつ、意識としての我々にとって
の存在の意味を、できるだけ究明することが、小論の目的である。

（一）「現象学」の問いの構造

末吉康幸

- 47 -
この数学者、真なる知（das wahre Wissen）にまで迫って行く自然的意識の道程であると解せられることができる。ヘーゲルは、自然的意識にとっての『現象学』の意味を述べている。そして、この道程において、意識は、この道程のモーメントを成している自己の諸形態を経験し自己を親しみして行くとされる。この場合に、意識に求められているのは、『現象知の非真理への自覚的洞察』である。すなわち、現象知である各々の意識の形態が、真なる知ではないということを自覚的にできることである。
『精神現象学』における存在への問いの展開

右の Moment としての知を吟味することができるされているのであるが、自然的意識に求められているのは、むしろ、知と真理という Moment が内に現存するところの「自分が成する対象について知っている」ということ自体が、各々の意識の形態に対する、ヘーゲルは、意識の各々の形態の「否定の内に移行がなされている」という否定性はどのようにして明らかになるのか。それでは、知と真理が内に現存する意識の各々の形態の吟味は、意識の構造に基づいて如何にして為されるのか。各々の形態が何であるかどうかを吟味することができる、各々の意識の形態を次のように述べている。「最初に対象としてわれてきたものが意識にとって対象についての知を吟味する際の尺度として問題とされているものとしての事柄が、尺度ではなく、意識において吟味されるべき Moment である。すなわち、意識がそれににおいての知を吟味する際の尺度として問題とされているのである」とし、の形態は、真なる知の成立と真理の意味が問われる場面なのであり、両方の問いは不可分なものである。
存在或いは真理の意味を明らかにすることにおいて、何が基本的ない問戸なのであろう。このことを、「感覚的確信という
感覚的確信という意義の形態は、まず最初に、直接的なもの、或いは存在するもの、を知っ
ているということ（2）と規定される。すなわち、この意識の形態は、その直接性によって規定されている。そして次に、
事実の存在ただししか含んでいない（3）と語られる。すなわち、感覚的確信という意識の形態の真理を示すものとして
「存在」ということが語られる。
それでは、この「直接性」と「存在」とは、どのように関係しているのか。或いは、どのように意識の形態を、この両者
は規定しているのか。

イポリットが語るように、「それを使って使用するためには、比較・抽象・推論といった媒介を前提する名辞を使用することができる
新しい対象の前に立って、「ここに、存在する」と言うことしか知らない。「ゲソの精神状態」という意味で、直接的あるいは媒介的であり、
それ故、比較等の媒介を前提する「家」「夜」「昼」といった世界を分節する言葉を使用できなくなる。従に、「感覚的確信は、ただ「それが存在する」という意味で感覚的
確信は規定されているのか。すなわち、感覚的確信は、比較等の媒介を欠いているという意味で、直接的あるいは媒介的であり、
それ故、比較等の媒介を前提する「家」「夜」「昼」といった世界を分節する言葉を使用できずに、ただ「これ」「これが存在する」としか言
しない」と述べられる直接的には、「感覚的確信は、その内容によって、すぐさま、最も重要な認識として現われる。
「精神現象学」に於ける存在への問いの展開

しかし、この確信は、実際には、自分が最も抽象的で貧しい真理であることを表明している（82）と述べられている。そこからすれば、感覚的確信はその直接性に「それが存在する」としか言表しないということは、感覚的確信という意識の形成、その実質的成立の引力を示していると考えられる。感覚的確信は、生存の中でもない、直接的な確信は、「それが存在する」としか言表しないというのには、感覚的確信でない。「それが存在する」という状方で具体的内容を意味しているのである。それ故、「豊かな内容を取っている」言葉の演説は、それが演説で意味することができず、それ・それが存在することを意味するという。感覚的確信は右のような構造をしているによう。そうすると、「言葉の論破」であっても「感覚的確信の論破」である。このように確信として、感覚的確信の真理を含むことを、意識のこの形態の真理としているのであろうか。あるいは、「ある意味で、ヘーゲルにおいて、感覚的確信という意識の意味において、それが存在する」という言葉が、どのように点において真理を意味するか、意識自身の構造に即して考察されねばならない。
表現している単一の直接性が、感覚的確信の真理を成し立っている。この理由故にでは、両方の理由は、感覚的確信の真理には何の関係もないと考えられる。しかし、他の事柄が、別の事柄にある、存在するからである。又は「事柄が存在する」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。又は「確信の存在がある」という言葉の真理があるからである。
「精神現象学」に於ける存在への問いの展開

現実の真理を省察する資格を持つのは、言表のもの内の存在拡大が成立しているかよりにおいてであり、また、その存在に現われる存在の概念が、確信の根拠として問題にされるからによって、意識の形態は問題されることによって、意識の形態が存在されるのである。

ヘーゲルは、「感覚的確信」という意識の形態の吟味と存在あるいは真理への問い、どのように展開されているかであろうか。

第一の弁証法では、対象が存在するのであり、真なるものの本質である（84）から、対象が、実際にには感覚的確信の概念が、対象が、吟味に向けられているということは、この弁証法が意識の形態の本質的吟味であることを意味している。第一の弁証法が、すでに対象の概念に向けられているということは、対象の概念に、意識の形態の吟味は、確信しているということにおいて存在するものである尺度としての対象が、吟味にささらされることにおいて成立するから、（84）で見たように、意識の形態の吟味は、確信しているということにおいて存在するということである。
我々は、「感覚的確信」という言語の役割を注意しており、それがなければならぬ。ヘーゲルは、感覚的確信という意識の形態を規定する場面で、この意識の形態の対象を「純粋な、これ（reine Dicks，8）」と言っているのである。それ故、この「これ」というのは、この意識の形態の先の考察から見るならば、この形態の存在の概念に属し、存在するものである。それが、この意識の形態の存在概念における対象を表わしている。したがって、「これは何か」という問いは、感覚的確信が、存在するものである。ヘーゲルは、この問いを「これ」の二つの形態たる「今」と「此処」に分けている。そうすると、この問いの答えは、「今」という形態に即して見れば次のとおりである。

或る時点では、「今は夜である」。そして、現在では、「今は昼である」ということになる。

考察のポイントは、この答えにおいて、意識における対象の本質を見てとることである。ヘーゲルは、次のことを見ている。すなわち、否定的なもの、一般として存在するイ。すなわち、第一に、存在する昼ではなく、存在する夜の存在である。という性格をもっている。したがって、第二に、対象は「今」としては、直接に意識の内容となっていられるものであり、したがって、否定的なもの、一般として存在するイ。すなわち、第一に、感覚的確信という形態の意識の存在の概念すなわち「単一の直接性」に属し、存在するイ。すなわち、否定的なもの、一般として存在するイ。
『精神現象学』に於ける存在への問いの展開

それでいて全く一様にこれでもあればあるところの単一なものを、我々は普遍的なものと呼ぶ。したがって、普遍的なものであるという意味において、存在を存在するものであるというその本質において、意識にとっては、普遍的なもの（『媒介されたもの』）の方なのか。

この第二の弁証法に於いては、「思い違いとしての」感覚的確信の真理は、私と対象としての対象の内に、すなわち、思、思い違いということの内にある。対象が存在する、なぜなら私とそれについて知っているからである。」（86）とされ、私が見ているということを聞いていてということ等の直接性の内にある感覚的確信の真理が、私と対象としての対象の内に、すなわち、思い違いということの内にある。それが存在する、なぜなら私とそれについて知っているからである。」

これが木であるのは、私がそれを見ているからである。また、これが家であるのも、全く同じ理由故に。この時思い違いしての感覚的確信の真理は、どのような力を持っているのか。両方の場合の真理は、同一の確証を、
すなわち見ているということの直接性と自分の知についてのそれぞれの確実性（Sicherheit）と保証を持っている。だが、
一方の真理は、他方において消失してしまう。

すなわち、直接性としての真理が確証するのは、表象されているそれ故の事柄の存在ではない。それ故の事柄の存在を表象している知すなわち意識のモーメントとしての知があるからである。つまり、直接性と直接性としての真理が確証する知の相互関係が、それぞれの事柄を表象している知すなわち意識のモーメントとしての知があるからである。

しかし、意識に真理が現われて行くそれがない。それ故、意識自身に真理が現われて行くことを不可能にするから、真なる知ではありえない。というのも、『よそ意識が他の対象について知っているということの内に、』必ずしも、意識がその対象について知っていることによって、そのように普遍的なものの（＝媒介されたもの）を把握しない思いなしに対して、対象としてない存在するものを普遍的なものとして把握することによって、すなわち、存在の概念において普遍性を把握していることによって、諸々の事柄を表象している知とは異なり、存在に現われて行く。それ故、真なるものは普遍的なものであり、真理なりは存在へ
「精神現象学」に於ける存在への問いの展開

意識の形態を規定しているのは、その存在の概念であり、そして、その存在の概念の普遍性こそが完明されるべきであることが明らかになった。知覚という意識の形態は、この普遍性が問われる一つの場面である。すなわち、知覚は、自分にとって存在するものであるこ

(三) 知覚

知覚の存在の概念は、どのように規定されているのか。存在が普遍的であるのであれば、存在が規定ないしは否定的なものをそれを五つの概念とす

あるものは、規定された存在の概念である。存在がこの概念を表現するものはその直接性においてあるから、この否定的なものを共有する「物」が、知覚の存在の概念とされる。このような存在の概要を持つものを、「ある等々から」いうことになる。すなわち、「これは白くある」という存在の概念に基づき、存在する

この物は、それ自身は存在するのではない直接的なものをある諸性質である。これは白くあると共にあるのか、存在する概念である（nachweise）たる多様

な諸性質から区別されて、「単一の自分自身に等しい普遍性」（94）を保証しているのか。あるいは、知覚における真なる知

- 57 -
物という存在の概念は、意識の現実の知覚においては、次のように展開される。

「これは、白くあると共に、幸くもあらん等々だから」ということによって指定されているが、
等々と語られる同一の「これ」というのである。そして、その場合、「これは白い」、「これは幸い」等々は、
「これ」と「これ」が対象に存在する自的である」（98）

だが、諸性質は、多様を成し、したがって、相互に区別しあっている。そうであるかぎり、各々の性質は、
相互に孤立し、別々の性質を有する（98）。

どのような一つの各々の性質は、相互に排除し合い、単なる一つの性質を有する（98）。

この存在の概念の普遍性も解体し合や、一緒に「これ」は、相互に排除し合い、単なる一つの性質を有する（98）。

なぜなら、白くある「これ」や幸いある「これ」は、相互に排除し合い、単なる一つの性質を有する（98）。

そこで明らかになったのは、意識の直接的なものが、相互に独立し、別々の性質を有する（98）。

したがって、存在の概念の普遍性も解体してしまえばそうな。このことによって、物とし
ある「これ」は、相互に排除し合い、単一の存在するものとして無媒介に確信されていることになる。

かくて、意識は、単なる思い」、「いたずらな」ということであるにすぎない。
『精神現象学』に於ける存在への問いの展開

まず最初に検討されるのは、次のような意識の態度である。「一物を一者として認め」（99）諸性質の相違を我々が物を受}

け取る観点の相違によるものとし、「普遍的媒体である」（99）意識の態度である。

こうすると、普遍的媒体のうちにある諸性質は、「例えば白は黒との対立の内にのみある」ということである。しかし、一物を一者であるのも、他物に対立しておればこことである。そののが一物を自分の他者を排除する。そして、一つだけ、一物が一者であるかぎりにおいては、次のような意識の態度である。物を普遍的媒体、一者であることを反省に帰属するものであるとする態度である。

それが「本来の」とは、一者であるかぎりにおいては、次のような態度である。物をもっとも代する爾者（一者と普遍的媒体）とする。したがって、次に検討されるのは、物の性質と呼ばれた当のものが自由な性質とし

て表象されて初めて成立することである。（100）

ヘーゲルの検討は、右のような結論を引き出す。「意識は、自分自身と全く同様に物をも代る代する爾者（一者と普遍的媒体）とする。」（100）

しかし、ペリコの検討は、右のような結論を引き出す。「意識は、自分自身において相互に対立した真理を表してい

る。」（100）

しかし、ペリコの検討は、右のような結論を引き出す。「意識は、自分自身において相互に対立した真理を表してい

る。」（100）

しかし、ペリコの検討は、右のような結論を引き出す。「意識は、自分自身において相互に対立した真理を表してい

る。」（100）
問題の点、物が一つであるとしても、他物に対するところそこのことである。物が一つであるか否かにおいては、その物はむしろ、すべての物に等しい。

たとえば、意識が「黒ある」という存在に特異されたものそのものをとするならば、そこに特異された物として「黒ある」という存在になっている。したがって、白である物を黒である物として表象している。したがって、白である物を黒である物として表象している。したがって、白である物を黒である物として表象している。したがって、白である物を黒である物として表象している。したがって、白である物を黒である物として表象している。したがって、白である物を黒である物として表象している。

一方、他物を物の一つを自他物との区別を自他物の物を含むという構造が問題である。その問題を、他物からの本質的区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持っている。他物に対する区別を自他物内に持いている。
『精神現象学』に於ける存在への問いの展開

諸性質のすなわち普遍的媒体の相違性も亦は自分自身に渇むべきである。そして、この相違性はなるほど必ずしも

であっても本質的定在をすべきではない（Ⅲ）何故「この相違性は必要的である」のか。亦は無物がその本質的定在すなわち本質的性質によって他物から区別されるよう

なったり。このことによって、他物との連関が定在され（Ⅲ）したがって、「自分自身を他者のうちに持つ」。という物の構造は、その本質的性質自身においてある人々が

ある。なぜなら、この「他者のうちに自分の本質を持つ」。という物の構造は、その本質的性質が相違性が必然的になるわけではありませんから。むしろ、この相違性が必然的になるのは、

一つの物自体においてであり、本質的性質は本質的とされるのか。この本質的性質と非本質的性質の区別において、本質的性質が自然的である性質の区隔

って、物は単に単一の性質である（Ⅲ）。だから、本質的性質が物として存在定在されるということになり、結局、意識は話ししないに違いない。してその本質的性質と

非本質的性質の区別において、本質的性質が物として存在定在するという点にある。このように

前述の本質的性質が物として存在定在するという点にある。このように

したがって、物が他物ではない者であるということは、「その一」。という概念では確定され得なかったが、今や、その単一

ににおいて普遍的媒体でもある。ことわざの本質的定在の規定性によって確定され得るようになった。
が、一対自存在と他存在の両者が、本質的に一つの統一においてあるのだから、今や、無制約で絶対的な普遍性が現
存し、意識は、ここに初めて真に悟性の国に入るもの（図1）と述べられ、右に示された無制約的普遍性としての対象の構造
には、知覚はその存在の概念によっては達し得ないとされる。いったい、何故、知覚は、この無制約的普遍性に達し得ない
のか。知覚の存在の概念の不十分さは結局ここにあるの。
「あればあり、これもある」という普遍性の性格を、物は普遍的媒体として持っている。だが、物を普遍的媒体、意識
を欠いており、むしろ、諸性質に解体してしまおう。そして一方、その逆の態度において見られたように、普遍的媒体としての物は、それ自身にその統一の原理を
一であるということ自身としても、そのことによって、一なる物が、他物ではないという自分の同一性を保証していな
いのですから、あればでもこれでもある。すなわち、「あればでもこれでもある」と同時に「単一であ
る」という普遍的なもののも（普遍的媒体）との両極に分離する（図1）。

この展開に於いては、真理＝存在と意識の形態は、次のように関係していた。意識の形態を規定しているのは、当該の形
精神現象学」に於ける存在に関する問いの展開

【精神現象学】に於ける存在への問いの展開

(1) Jean Hyppolite, Genèse et Structure de la Phénoménologie de l'esprit de Hegel, Aubier 1946, P.86

(2) 引用文籍（）は引用日期の付加。

(3) 引用文献の一部は、本文イタリックの部分。

(4) Phénoménologie des Geistes, G.W.F. Hegel, Werke in zwanzig Bänden, Band Ⅲ, Schwimann Verlag : このテキストから
L. Feuerbach, Zur Kritik der Hegelischen Philosophie; in "Kleine Schriften" Theorie 1, S.105